

校内研究の概要

令和5年度 北杜市立長坂小学校

1. 研究主題と主題設定の理由

○研究主題 **主体的に学びを深める児童の育成**

○副主題 ～個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を通して～

○主題設定の理由

本校ではこれまで、「対話」を活用した授業改善に取り組んできた。多田（2006）は、「対話」とは「言語や非言語により、相手とコミュニケーションを行い、共有できる価値観や概念を生み出していく行為である。」と定義している。一方「会話」は、「とりたてて目的があるのではなく」「楽しさを共有することに意味」がある行為として定義しており、目的に大きな違いがあることが分かる。授業において、教師から一方的に知識を教え込むのではなく、対話を通して知識を共有したり、答えを創り上げたりする活動を取り入れることによって、主体的に学びを深める児童の育成を目指してきた。

また、昨年度は「個別最適な学び」の視点を取り入れた。「個別最適な学び」とは、「指導の個別化」と「学習の個性化」から成り立っている。昨年度の研究の中で、「指導の個別化」に関わって、難易度を調整した学習プリントを用意して児童に選択させたり、自力解決が困難な児童にヒントカードを配付したりするなどの手段を講じてきた。児童に自ら選択する機会を与えることで、主体的に問題に取り組んでいた様子が見られたことから、これらは効果的な手段であることが明らかになった。しかし、どの発達段階の児童に対しても、またどの教科や単元に対しても活用できるものなのか、さらに他にも手段はなかったのか、まだ研究を進める余地が残っているのが現状である。

そこで今年度は副題に、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を通して」と設定した。「協働的な学び」を成立させるためには、これまで取り組んできた「対話」が必要であると考えた。多田（2006）は、対話の機能として、①お互いの情報を伝え合う「情報の共有」、②参加者が叡智を出し合って新たな解決策や知恵を生み出す「共創」、③伝え合うことにより相互理解や相互親和を深める「人と人とのかわりづくり」の3点を強調している。これらは、中教審答申（2021、P.18）で示された、「多様な他者と協働」することを通して、「あらゆる他者を価値のある存在として尊重」し、「持続可能な社会の創り手となる」ために必要な資質・能力を育成することを目指した、「協働的な学び」の理念とも一致する。さらに、昨年度から取り組んできた「個別最適な学び」の視点を普通の授業に意識的に取り入れることによって実践事例を増やし、さらに発展させていきたい。

そして、中教審答申（2021）では、以下のように述べられている。

学校における授業づくりに当たっては、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の要素が組み合わさって実現されていることが多いと考えられる。（中略）授業の中で「個別最適な学び」の成果を「協働的な学び」に生かし、更にその成果を「個別最適な学び」に還元するなど、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実し、「主体的・対話的な学び」の実現に向けた授業改善につなげていくことが必要である。

「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）（2021,P.19）

「個別最適な学び」と「協働的な学び」は、それぞれが独立して存在するものではない。中教審答申（2021）

に述べられていたように、『「個別最適な学び」の成果を「協働的な学び」に生かし、更にその成果を「個別最適な学び」に還元する』ことが大切なのである。これらの指摘をもとに、本校で考える「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実のイメージを図1に示した。「個別最適な学び」で学んだことを「協働的な学び」で生かし、更にその成果を「個別最適な学び」に還元することを矢印の循環で表現している。そして、その循環は1単位時間の中で完結するとは限らない。単元を通して循環する場合もあれば、教科の学びを通して循環する場合もあり、教科を超えて循環が起こる場合もある。そういった循環を年間の学習を通して行っていくことによって、一体的に充実していくものと考えている。

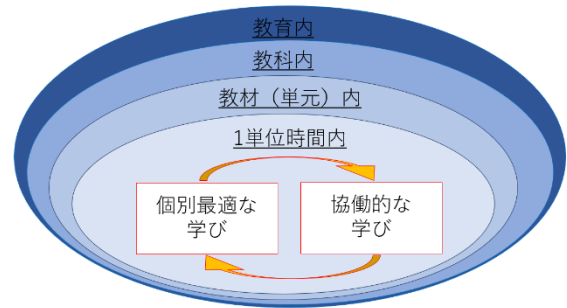


図1 「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実イメージ

以上のことから、今年度の校内研究のテーマに関わって3つの柱を設定する。

- ① 「個別最適な学び」の一層の推進を図ること
- ② 「対話」を通して「協働的な学び」を推進すること
- ③ 「個別最適な学び」と「協働的な学び」の循環を意識して教育活動を行うこと

これら3点に対して研究を進めることによって、今年度の研究主題に迫っていきたい。

2. 「重点目標」と「手立て」について

「研究主題」を達成するための「重点目標」を設定する。授業研究を進める際には、常に「重点目標」を意識するとともに、その目標に迫るための「具体的な手立て」を各授業に設定し、成果と課題を挙げ次の授業に生かす。

重点目標①「個別最適な学び」に対する教材・教具、及び手段の工夫
 (手立ての例) 意欲を喚起させる学習課題、ICTの活用、学習プリントの工夫、
 ヒントカードの活用・・・等

重点目標②「共同的な学び」に対する教材・教具、及び手段の工夫
 (手立ての例) 意図的な発問、学習形態、対話の活用方法・・・等

3. 研究内容

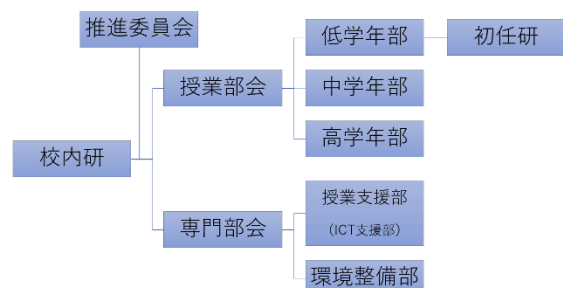
- 「個別最適な学び」の一層の推進 また、実践事例の積み上げ
- 「協働的な学び」支える「対話力」の計画的な指導。また、授業での活用。
- 「ICTの効果的な活用」

(その他)・教材提示、課題設定、発問等の工夫・本校児童の実態と課題の把握

- ・ユニバーサルデザインの継続的な取組
- ・板書つづり
- ・家庭学習の改善

4. 研究組織

- ・授業部会…①低学年ブロック ②中学年ブロック
③高学年ブロック
- ・専門部会…①授業支援部 (ICT支援部を統合)
②環境整備部



※研究推進委員は、校長・教頭・教務主任・研究主任・授業部長（必要に応じて）とする。

※全職員が【専門部会】【授業部会】それぞれに所属する。

※各部の活動内容

- ・授業支援部…学習規律の確立、教材・教具づくり等に取り組む

授業における ICT の効果的な活用と教材の収集などを行う

- ・環境整備部…校内掲示の検討や作成、自学・家読の作成等を行う
- ・授業部会は、低・中・高学年の3つに分かれ、研究授業等の検討を行う

※略案を用いて、互いの授業を見合う（ブロック研）の積極的な導入を行う

※日々の実践を見合う授業参観も継続して行う

5. 研究の日程・流れ（予定を変更し、研究授業や理論研究、講師を招聘しての学習会などを行うこと

	月・日	内容
①	4月17日（月）	今年度の研究について
②	5月22日（月）	理論研究「対話について」・新型電子黒板の使い方の講習会
③	6月26日（月）	研修会「個別最適な学びの推進について」※講師招聘
④	7月24日（月）午前中	研修会「Q-Uテストの分析と活用について」 （授業部会・専門部会）
⑤	8月23日（水）午前中	研修会「教育課程還流報告、全国学調・CRTの結果と考察」 （授業部会・専門部会）
⑥	10月 2日（月）	研究授業①（中 学年or 高学年）
⑦	10月23日（月）	初任研研究授業（2年生）
⑧	10月25日（水）	研究授業の反省や指導案検討、専門部会
⑨	11月27日（月）	研究授業②
⑩	1月29日（月）	研究授業③
⑪	2月26日（月）	今年度のまとめ・研究紀要の発行に向けて

6. 引用・参考文献

- ・文部科学省（2021）『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）』
- ・佐藤公治（1996）「認知心理学からみた 読みの世界－対話と協同学習を目指して－」北大路書房
- ・多田孝志（2006）「対話力を育てる－「共創型対話」が拓く地球時代のコミュニケーション－」教育出版
- ・多田孝志（2009）「共に創る対話力－グローバル時代の対話指導の考え方と方法－」教育出版
- ・多田孝志（2011）「授業で育てる対話力－グローバル時代の「対話型授業」の創造－」教育出版